エッセー

学生に贈った「星野道夫のことば」

コミュニティ福祉学部教授　濁川 孝志

立教大学に奉職して 32 年が経ちました。ようやく、この 3 月で卒業です。その間、呼び名は色々変わりましたが、一貫して「全カリ関連科目」を担当してきました。スポーツの実技系の科目そして講義科目等多くの科目を担当しましたが、中でも「ネイチャーキャンプ」や「スキー」など、アウトドアでの合宿スタイルの授業は特に強く印象に残っています。これらの授業の良いところは、雄大な大自然の中で体を動かし心を解放することにより、大きな感動を学生と共有できることです。満天の星空に生まれて初めて流れ星を見つけ涙する学生や、白銀の樹林帯をスキーで駆け抜ける喜びを、顔をくしゃくしゃにして全身で表現する学生もいました。彼らが感動する姿を見るのは、教師冥利に尽きる瞬間です。

授業は自然の中で行いますので、“自然環境保全”の問題も一貫して重要なテーマでした。主に夜の座学の時間ですが、学生たちはこの大切なテーマに関し真剣に議論し、色々面白い考えや意見を披露してくれました。特に専門分野の異なる複数の担当者が、コーディネーターを中心に協力し合いながら授業を進める「総合 B」というカテゴリーで実施した「体験学習ー環境と人間ー」という授業は秋田県田沢湖周辺で行ったのですが、そこにはバラエティに富んだ魅力ある講師陣をお呼びすることができ、それらの講師陣と学生を含め、焚火を囲み、人生について熱く語った夜が懐かしく思い出されます。

アウトドアの授業で、僕が一貫して学生に伝えたことがもう一つあります。それは「星野道夫」です。星野道夫の写真や文章は次代を担う学生にとって何か大きな示唆を与えてくれるはずだ、という僕の直感があったからです。心に響く星野道夫の言葉は沢山ありますが、中でも現代を生きる若者たちに一番伝えたい言葉は、「好きなことをやってゆこう」という言葉です。

「好きなことをやってゆこう」というのは、星野道夫が悩みに悩み抜いた挙句、ようやく辿り着いた答えです。山の事故で親友を失い命の儚さを痛感した星野は、生きる意味を見失い苦しみます。自分がこの先どう生きて行けばいいのか見当もつかず、闇の中でもがき苦しんだ結果得られた結論は、こんなに単純でありふれた答えでした。しかし、この「自分の好きなことをやってゆく」という意思こそ、今の日本の若者にとても必要な考えだと思うのです。

ある専門家は、今の日本社会の様相を「蓄財に関わる欲望の充足、つまり物質的な価値観ばかりが注目された結果、生活水準は向上しつつある一方で、人々の生きる意味や目的意識が失われたのではないか」と分析しています。確かに、今の日本の社会は、物質的には豊かですが、生きる方向を見出せない若者たちが彷徨っているように見えます。

自分の生き方を見出せず、その結果自暴自棄になり、挙句の果てに無関係な市民を傷つける若者たち。被害者にとっては理不尽極まりない事件であり、同時に加害者の心の闇を考えると、そこには僅かな救いすら見出せません。一方、他人のいじめや中傷に耐えられず、簡単に自らの命を絶つ若者たち。もちろん、いじめなどあってはならないことなのですが、それにしても今の日本の若者たちの、なんと脆弱なことか。渦中にいる者にとって、悩みは深刻で希望や救いの光が見えないのでしょう。しかし、君たちの世界は今いるその世界だけじゃなく、この先どんな素晴らしい未来が待っているか分からないではないか。もう少しだけ頑張れば、その先にどんな素敵な人との出会いがあるか分からないではないか。僕には、そのように思えてなりません。

面白いことに、今より生活が苦しかったはずの戦時中やその後の高度成長期には、現在ほど多くの自殺者はいませんでした。それはなぜか。答えは簡単で、日々を生きる方向性が明確だったからです。生活が苦しいだけで人間はこの人生を放棄するのではなく、むしろ生きる目的、目標の喪失が絶望感を生み出すのです。戦時中は戦争に勝つこと。戦後の高度成長期には、右肩上がりの経済の中で貧しかった日々の暮らしが豊かになること。これを目指して誰もが明確な生きる方針を持ち、苦しくても必死に働けば良かった。ところが現在、明日のパンを心配する必要は無くなり、生き方も価値観も自由で多様になりました。生き方が自由で多様であること自体は素晴らしいことですが、自由であると言われた時には、自分で目標を定めないと何処を目指してよいか分からなくなります。自由の持つ不自由さです。

僕は、この“不自由さ”に戸惑う学生たちを大勢見ます。自分の将来像を明確に描けず、悩む学生。そして焦りと共に、周囲の動向に急かされるように就職活動に突入する学生。そこには、“生きがい”や“働きがい”は見えません。そんな彼らに一番欠けているのは、「好きなことをやっていこう」という発想です。そうです。それは、先にも触れましたが、まさに星野道夫自身がもがき苦しんだ末辿り着いた心境なのです。ただ一方で“自分の好きなこと”と言われても、それが何か解らないという若者も沢山いるでしょう。しかし、真剣に求めていれば、いつも頭の片隅に置いておけば、それはいつか必ず見つかります。真剣に求め続ける人にはそれが見え、求めない人は、例え目の前にあってもそれが見えない。星野道夫はムースのとあるシーンを求め続け、その場面に遭遇し写真に収めるのに実に 5 年もの歳月を費やします。そして、「求めること」と与えられる「チャンス」の関係を次のように述べています。

僕は思う。自分が本当にやりたいことや見たいものがあり、それをあきらめずにいつも考えていると、いつかそのチャンスが来た時、その前で立ち止まれるのではないか。もし真剣に考えていなければ、チャンスの前を気づかずにどんどん通り過ぎていってしまうのではないだろうか。長かったムースの撮影は、思いもかけず、そんな教訓を僕に語りかけてくれた。『アラスカこぼれ話；待ち続けること：星野道夫著作集 5 巻 p259』

早くしてそれを見つける人もいれば、なかなか見つけられない人もいるでしょう。しかし、悩みながらそれを捜すプロセスこそ人生の大きな学びの機会であると思うのです。そして大概それはジッと思いつめて考えている時ではなく、どこかスーッと体の力が抜けた時に、不意に心に降りてくることが多いようです。

このような学生たちに、星野道夫の写真やエッセイはとても眩しく新鮮に映るようです。ある種の驚きと共に、目から鱗が落ちるような衝撃を語る学生もいます。ではなぜ星野道夫の作品は、彼らにそのような影響をもたらすのでしょうか。一つは、彼のエッセイに描かれた「生き方の多様性」だと考えます。星野道夫は、アラスカで交流のあった多くの友人たちの生き様について書いていますが、描かれたどの人生も圧倒されるような個性で光り、それらはどれも一般の尺度からは外れ、同時にとても魅力的です。そこには多様な価値観に裏付けられた明確な人生があります。

例えば『旅をする木』に描かれたビル・フラー。彼は 70 歳を過ぎても水道の無い暮らしを続け、多くを持たない生活をしています。高齢になってから日本語を学び、北海道から九州までの自転車旅行を楽しみ、その一方で、カリフォルニア大学で植物病理学の修士号を修め、しかし世間に評価されるような肩書は持たず、幼稚園でのボランティアなどをしながら飄々と生きています。何よりも、そんな自分の人生を肯定しています。そんなビルを、星野道夫はこのように評します。

世界が明日終わりになろうとも、私は今日リンゴの木を植える・・・ビルの存在は、人生を肯定してゆこうという意味をいつもぼくに問いかけてくる。『旅をする木；生まれもった川：星野道夫著作集 3 巻 p155』

そして何よりも、星野道夫の生き方。これらの多様な人生に触れたとき、学生たちは、「ああ、これでもいいんだなあ」というある種の安心感に包まれます。ここで感じる安心感は“人と違う自分”の肯定に繋がり、それはやがて“生きがい感”を生み出す源泉になるのです。つまりは、“自分の中にある他とは違う個性”を自分自身が許し、受け入れられるようになる、ということです。他者とは異なる自分の人生を受け入れ、それを肯定できた人は、自分と異なる他者の人生も肯定できるでしょう。それはとりもなおさず、他者との共生の基礎となる価値観です。つまり“好きなことをやってゆく”という視点は多様性を容認すると共に、共生社会に繋がる重要な発想なのです。

「Personal definition of success（成功の個人的定義）」つまりは、自分の人生の成否は社会の評価ではなく自分の価値観で決める、という意味でしょうか。星野道夫はビル・フラーの人生に、この言葉を当てはめています。自分の未来がよく見えなかった学生たちは、星野道夫に触れたときこのような価値観の存在に気付き、かすかに芽生えた希望の下に自分の人生を再考し歩き出すようです。

にごりかわ　たかし

参考文献

星野道夫　『星野道夫著作集 3 巻』（新潮社）
星野道夫　『星野道夫著作集 5 巻』（新潮社）
濁川孝志　『星野道夫の神話』（コスモスライブラリー）
濁川孝志　『星野道夫　永久の祈り』（でくのぼう出版）